

漁業者としての私

—— 家族と仲間に支えられ ——

和歌浦漁業協同組合女性部
部長 藪 江津子

1. 地域と漁業の概要

和歌浦地区は和歌山市の南端に位置し（図1）、遠い昔は万葉集に謳われ、近年は片男波海水浴場・ジャズマラソン等で知られる風光明媚な観光地です。

和歌浦漁協は正組合員25名（内女性10名）と遊漁船業者9名の准組合員構成です。

主に船曳網漁業で15年度の生産額は4千4百万円程度の小規模漁協です。

図1. 和歌浦漁港位置図



2. 研究グループの組織と運営

女性部は昭和54年12月に私の義母が初代部長として、17名の部員で発足しましたが、現在は10名になり、部長1名、副部長1名、会計1名、会費は一人年間3,000円と定め、オール役員グループ感覚で活動しています。

設立当初から続けている、正月の十日戎・7月の蛭子神社の潮祭りと片男波海水浴場の売店経営が三大活動で、女性部だけでなく組合員と合同行事として取り組んできました。中でも海水浴場の売店は、義母が切り盛りしている釣り道具・餌等売店の経営ノウハウを活かし軌道に乗せたもので、夏場の2ヶ月間ですが部員のバイトになり女性が自由に使える収入として大変喜ばれてきました。近年はおさかなママさんの仲間入りをして魚食普及も手がけるようになりました。又、組合でお祭りしている十日戎は、地域の伝統行事として次代に伝承する活動と位置付けています。

3. 研究・実践活動課題選定の動機

しばらくは私事の発表になりますが、家族と仲間の温かい愛情と指導のおかげで漁業のことは何も知らない普通の女性も、漁業者と認められ正組合員になれた過程と、やりかたで漁業はまだまだ勝ち組だと思えたことを報告します。

4. 研究・実践活動状況及び成果（効果）

私は、昭和34年漁業とはまったく無縁な家庭の3姉妹の末っ子に生まれ、高校の同級生と自由気ままな大恋愛の末20歳で結婚しました。

彼は、専業漁家“やぶ新丸”の長男だったのです。

それからは180度転換した生活になりました。

当時はまだシラス漁は最盛期の頃で、4月5月は早朝3時から起こされ、大漁のシラス運搬に精も根も尽き果てる毎日でした。なれない仕事に加え言葉や習慣も違い、漁業はこんなにつらい仕事とは思ってもいませんでした。すこしなれて疲れてきた頃、義父が話してくれました。「朝はよからきつい仕事やと思うやろけどな～、今日水揚げ100万円を超えたんやで、漁師は働き方でお金にもなるんや」と、私は“一日で100万円も！そうなんか、すごいな、働き方か～！？”と納得しました。

けれども、豊漁は長続きしませんでした。水揚げ量は年々減少し、例年の50%を割る年もあり、船の償却や毎年新しくする漁具代金等なかなか経営は大変だともわかってきました。

そんな平成2年、頼りの義父が亡くなり、経験の浅い夫が31歳で網元を継ぐことになりました。年上の乗組員ばかりでうまく仕事ができるのか心配でしたが、幸い乗り子さんも一生懸命協力してくれ、組合役員の助言もあり軌道に乗ることが出来ました。翌年家計のバトンタッチも受け本格漁師夫婦のスタートを迎えました。

船曳と地曳網漁・観光船を引継ぎましたが収入は減少の一途です。このままでは子供3人の養育も心配です。義父の言葉を思いだし、経営を見直すことにしました。

- ① 船曳網 → 大漁時の値崩れ対策にシラスの加工販売を考える。
- ② 地曳網 → 観光地曳を廃業する網元から権利を購入し観光地曳に転換。
- ③ 観光船 → 共同経営者2名から権利を買い受け、夫婦の経営とする。

私も1ヶ月間集中勉強して小型船舶一級の免許を取りました。講習で大阪へ通った2週間は、操縦は全く未経験だったので泣きながら学びました。

二人三脚の経営が始まりました。世界リゾート博覧会を機会に観光船を木船からFRP船に乗り換え、私も運転者となり双子島遊覧をします。お客さんの笑顔がとてうれしいです。県漁港課の許可を得て乗船場も新設しましたが、博覧会終了後は2・3人を乗せて遊覧する日々になりました。赤字経営続きですが和歌浦湾の観光名物になればと操業しています。今年も正月三が日を返上し運航しました(記事1)。

又、観光地曳網(写真1)は当初ハマチとタイだけでしたが、和歌浦湾をもっと上手にPRできないものか？悩みを、女性部活動の場で部員に相談した処、魚種を増やせばとアドバイスを受けました。組合員も船曳網休漁日に出漁し小アジ・タコ等を

地曳網に入れるよう協力してくれました。捕れた魚をその場で食べる海鮮バーベキューと地曳網をセットにしたところ、これがヒットし観光業者より問い合わせや見学者が増えるようになりました。なんとと言っても和歌浦湾のとれとれです、新鮮さと手軽さが受け3月～11月の土日を中心に70回程度網を曳くようになりました。

次ぎにシラス加工(驥2・3)です。自分で炊いたシラスを地曳網のお客さんに食べてもらったところ、大好評で土産用に購入してくれました。気をよくして、やぶ新丸水揚げの多量のシラスを、無添加加工しましたが大失敗です。家庭でつくる少量と販売用に大量加工するのでは、大きな違いが有ることに身をもって知らされました。

多くのお客様に喜んでもらうのは尚更です。加工業者にお願いして本格的加工技術の習得に励みました。試行錯誤を繰り返して、納得出来る加工品の完成まで半年かかりました。現在は二人で、一度に5キロを一日に5～6回煎って天日干し(驥3)しています。途中、雲行きが怪しくなると大慌て、冷蔵庫に緊急避難です。一時も気の抜けない作業が続きます。その上、塩分を含んだ蒸気を毎日浴びる状態で、上半身の肌荒れと腕の筋肉疲労で、自慢の美貌も台無しです。

苦勞の甲斐あって、口コミでお客様も年々増え、今では地元始め県外からも電話やFAXで注文が来るようになり、水揚量の30%は自家加工品で販売出来ています。

ワカメ養殖も始め、塩蔵加工の袋詰めにして同じように販売しています。

又、旅館宿泊者からの要望があり、4名が遊漁船業務主任者講習を受け、和歌浦湾内で小アジ・サバ・キスの釣船も始めました。これは、乗り子さんの収入です。

多角経営で大忙しですが、浜が作業場です。前準備を手順良く整えれば時間差でスムーズに流れます。加工の手伝いを部員さんをお願いし、無理なく楽しく作業をこなせるようになり、収入の安定も図れてきました。

漁業を何も知らなかった若輩の私がこの様に自信がもてるのは、女性部活動を通じてベテラン漁業者のアドバイスを受けられたこと、又、悩みやグチを聞いてくれる先輩がいたからだと心から感謝しています。

5. 波及効果

15年の漁業従事が認められ平成7年漁協の正組合員に加入出来ることになりました。女性の組合員加入が困難な漁協の多い中、大変な評価を得たと理解しています。又、2年前長女が結婚し、私達の経営方針に共感した新しい息子が夫と共に漁業を営む事になりました。後継者の誕生で夫は大張り切り、とても幸せなことです。私もやっと漁業者になれたかなと思えるようになり、5年前に女性部長と昨年県女性連の役員を引き受けさせてもらいました。すこ～し心にも余裕が出てきました。

6. 今後の課題や計画と問題点

今振り返りますと、私の漁業デビューと和歌浦漁協女性部の誕生は同い年だったのです。義母も後継者ができ漁業や女性部活動に積極的になれたのだと思います。

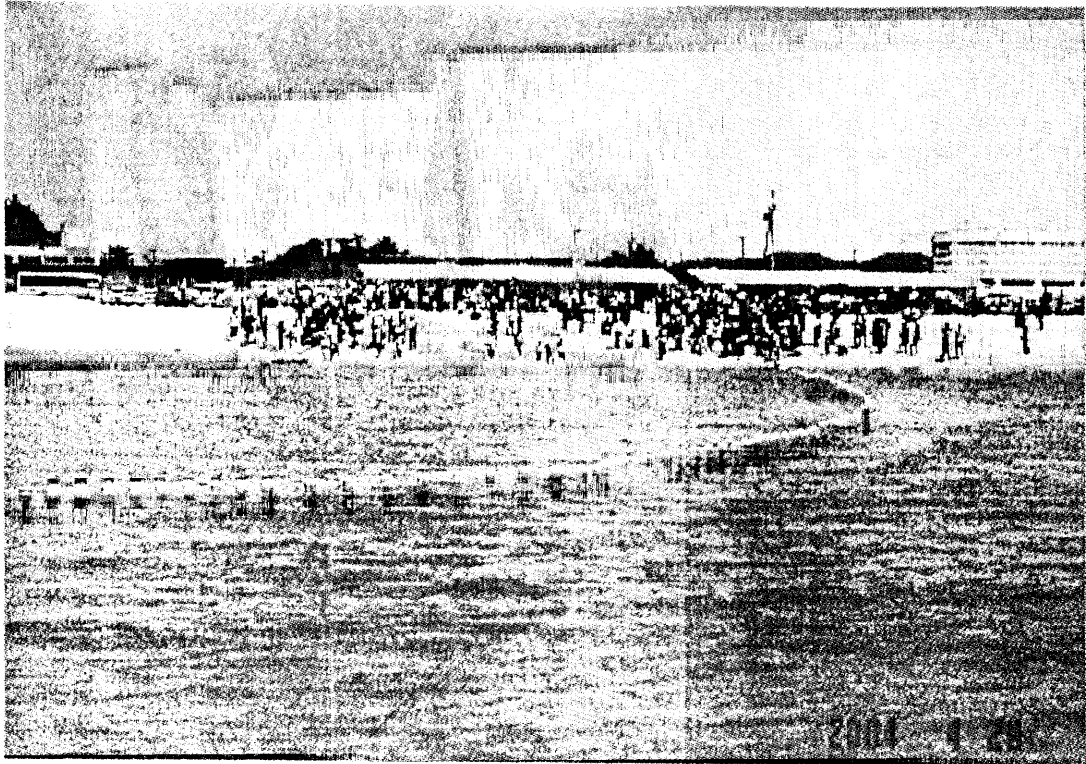
これまで、夏の海水浴場売店(写真4)は暑くて大変でしたが部員が一年中で一番輝くときでした。売店は8店舗有り、その内2店舗を和歌浦漁協が経営し、女性部は組合から委託を受け仕入から販売まで担当しています。遊びに来る客は毎年横ばい状態ですが売上は年々減少してきました。栈敷席での家族団らんが少なくなり、駐車場が近く飲食物の持込が多く見られるようになりました。又、昨年今年と台風で商品や販売器具・調理品等が流され、売店も半壊状態になり被害額で赤字続きです。おかげで楽しみの売店終了後の慰安旅行も中止になりました。

漁業不振も重なり“年間を通して収入になる活動はないだろうか？”集まれば話題にのぼります。県漁協女性連の研修会や視察に参加して、他県の自家産物加工や直販活動を知るにつれ、『私の経験が生かせる』、これからの活動はこれや！と実感しました。

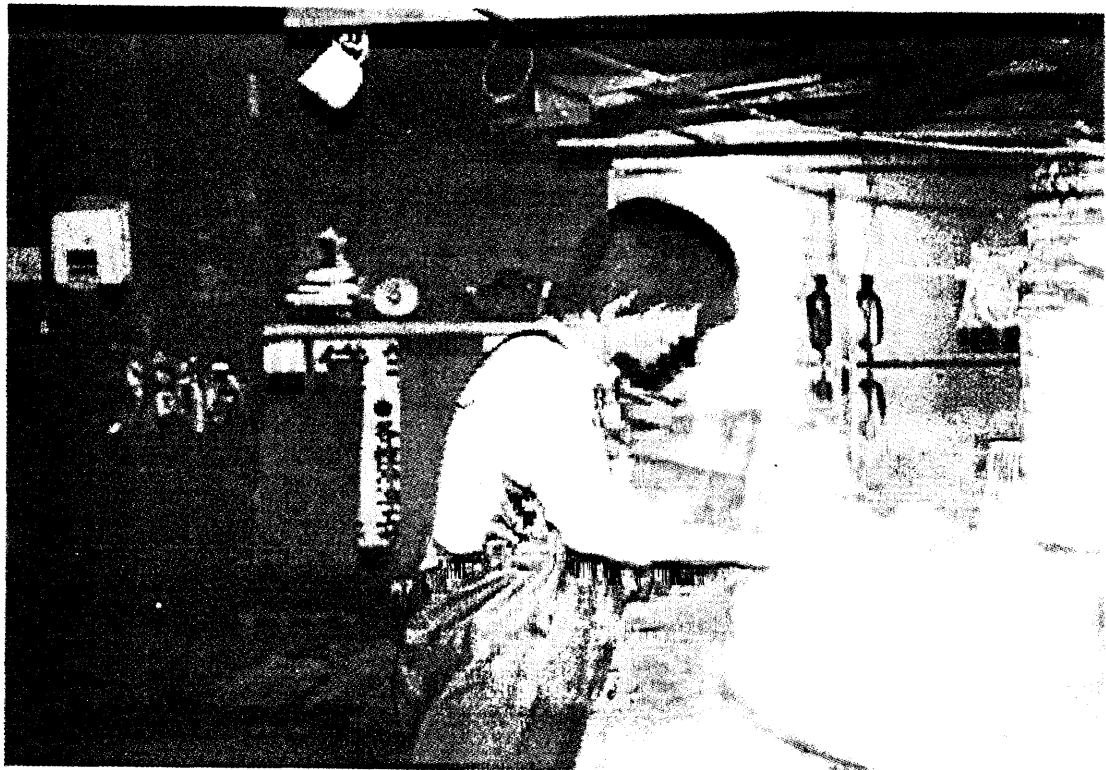
私の経験や見聞した事を部活動のたびに話し共同作業を提案しました。最近女性部で干物加工の意欲が出てきたので、和歌山市の支援を得て加工販売の視察を行いました。まだまだこれからの事業ですが、義母が築いた女性部の元気を取り戻したい。義父の言葉を又思い出します。

現在、多くの消費者はおいしくて安全安心な食料を求めています。私達にはその貴重な食料生産と加工技術を身に付けています。さらに浜の豊かな自然と素朴な暮らしは心身に安らぎを提供します。これにアイデアを組み合わせれば収入が伸びる、“漁業は勝ち組や”と確信し部員と共に作業に精を出しています。

◇ 観光地曳網 (写真1)



◇ シラスの加工 (釜揚げ) (写真2)



◇ シラスの加工（天日干し）（写真3）



◇ 海水浴売店（写真4）

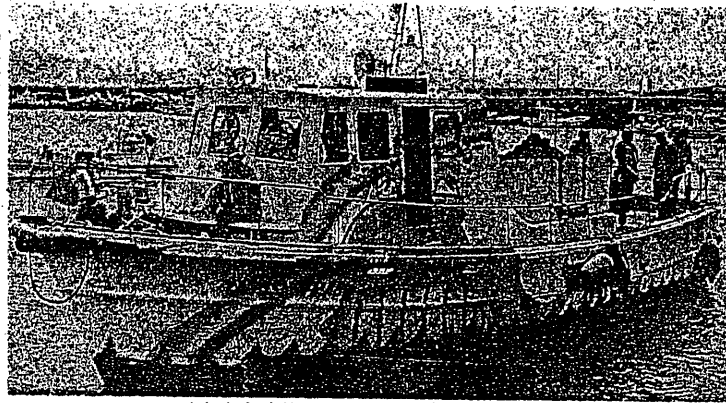


双子島観光の定期船復活へ

お正月、船上から万葉ゆかりの和歌浦の景色を楽しみませんか。和歌山市新和歌浦で海産物販売や釣り船を営業する「やぶ新」(藪豊社長)は正月三が日、和歌浦港から双子島を巡る観光遊覧船を運航する。定期運航を視野においたもので、和歌浦活性化のひとつにとの期待も寄せられている。

正月三が日に遊覧船

「やぶ新」が3月から土・日運航目指す



来年から本格運航予定の双子島観光遊覧船

観光遊覧船は、同社ものの、観光客の減少が和歌浦の宿泊客らをとともにも不定期運航に相手に昭和三十年代に移行。最近では廃船の話始め大いにきわったも持ち上がったいた

が、藪社長の娘婿、横の呼び水だったロープ田邦雄さん(24)が「処分するのはもったいない」と定期運航を視野に本格的に復活させることにした。

遊覧船は定員三十六人。和歌浦漁港内の船着き場から出発し、船内アナウンスで沿岸の万葉ゆかりの景勝地を紹介しながら、双子島を巡って帰港する。所要時間三十五分。

船上では、カモメとの自然の触れ合いも。パンの耳などを投げ与えると飛来し、カモメたちとの一緒に遊覧も楽しみの一つ。横田さんは「和歌浦湾を海陸から望む景色は昔の和歌浦に負けないぐらいの絶景。ぜひ遊覧船に乗って楽しんでいただきたい」。

「やぶ新」はじらす、塩ツカメなどの海産物を販売するかわら、観光地引き網も営業。最近では和歌浦観光

正月三が日は朝十時から運航(天候により変更あり)。大人千円、小人五百円。貸し切りは別途。申し込み、問い合わせは「やぶ新」(☎073・445・1536または44・0882)へ。

12/29
ゆかま新報